

紹介

○日本書紀纂疏 國民精神文化研究所編

日本書紀纂疏は室町時代亂離の間、博學多識を以つて一世に推された一條兼良が、書紀神代卷を神儒佛三教一致の立場から解釋せる神道論で、兼良の學問のみならず當代の思想を見るべき好箇の典籍である。しかも從來江戸時代の不完全なる刊本の流布せるに過ぎなかつたが、今こゝに國民精神文化研究所の松本彦次郎、中村光兩氏の手に依つて、兼良自筆本に最も近いと考へられる大永六、七年書寫の京都兩足院所藏本を底本とし、更に弘治元年書寫の神宮文庫本、天正七年書寫の菊亭本、正保四年書寫の靜嘉堂文庫等の諸本を照應して、綿密なる校訂の結果、學界の準據となるべき本書が公刊された事は、我々の深く喜びとする所である。

しかし更に望蜀の謗はあるかも知れないが、同じく兼良自筆本の系統を引くと思はれる、故内藤虎次郎博士所

藏の古寫本(六卷一冊、奥書「永正九_壬申年七月十二日以一
條殿後成恩寺殿御本於燈下令書寫加校合訖、治部卿卜部
兼永_{御自筆}」)や御巫清白氏藏の寫本(二冊)も參看されたならばと思ふのである。(菊判一六八頁、東京國民精神文化研究所發行、定價一圓七十錢)

○吉野朝史 中村直勝著

昭和二年「南朝の研究」を以つて、此時代の研究に一新機軸を出された中村助教授は、その後「北畠親房」その他の名著を引續き公けにされたが、今また「吉野朝史」と題する大冊を編まれたのである。

本書は前編吉野朝史總説、後編同各説の二部に分れ、總説は更に「米穀經濟から貨幣經濟へ」「神佛から人間へ」「武士と其家筋」の三章より成り、歴史が思想と經濟との相互關係に依りて發展するとの著者の史觀に基いて、此時代の歴史が概觀的に究明されてゐる。後編は既に世に問はれた大小二十三篇の論考、及び近時楠木正成自筆書狀の綜合的研究の結果、筆蹟並びに花押等より從來の年代的序列に疑問を提起された一篇を収録されてゐる。而

してこれら後篇の諸論考は、前篇の所論の基礎をなし、個々獨立の論ではあるが、全體の編次に於いて渾然たる時代史を形成してゐる。(菊判五一頁、京都星野書店發行、定價參圓八十錢)

○南山遺芳 神宮皇學館編

昭和九年建武中興六百年記念の事業として神宮皇學館は、主として三重縣に於ける吉野朝關係の史料を網羅し、更に遺蹟の寫眞を加へて展觀を行つたが、本書はその内尤なるもの約二百點を撰擇し、寫眞版として公刊したものである。

これを大別すれば吉野朝關係史蹟百十葉及び古文書古記録七十葉、孰れも簡明なる解説を附し、殊に文書記録には夫々讀み本を添へてあるのは研究者に對して多大の便宜を齎らすであらう。更に卷頭には「建武中興の御理想」と「伊勢に於ける勤王事蹟」の二論講を掲げて史蹟並びに文書記録から受けた切實なる印象を統一せしめ、寫眞と解題と概説とが經となり緯となつて、伊勢中心の吉野朝時代史を感銘深く物語つてゐるのである。(四六倍

判二六〇頁、神戸五典書院發行、定價參圓)

○金剛寺古記 大阪府

天野山金剛寺が、既刊の金剛寺文書以外に猶ほ、寫經の奥書等の零細なるものに、吉野朝御歴代並に楠木一族の歴史を物語るもの、ある事は夙に學界に聞え、中村助教授は「南朝の研究」にその詳密なる紹介をされてゐる。しかし未だその全文が上梓された事はなかつたのであるが、こゝに大阪府は建武中興六百年の時を思ひ、これを徹底的に精査せる結果、史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯として公刊したのである。

本書の内容は後村上天皇御宸翰御奥書三點を始め禪惠法印及びその他の奥書總計三百點、豊富に挿入されてゐる寫眞版は原文の佛を如實に傳へてゐる。更に卷頭には岸本準二氏の「金剛寺並に同古記について」と題する論を冠し金剛寺の沿革並に當時學頭職であつた禪惠法印の精細なる解説が附せられてゐる。兎に角史蹟調査報告としては異數に屬する本書は、近時斯界の關心の中心となる吉野朝時代史研究に寄與する所極めて大であらう。

(菊判一六四頁、大阪府發行、非賣品)

○明治前期財政經濟史料集成 第十卷

大 藏 省編

愈々完成に近づきつゝある本集成は、最近第十九回配本として「九分利付外國公債紀事」「七分利付外國公債發行日記」「在歐吉田少輔往復書類」を内容とする第十卷を公刊した。

明治新政府が新興の意氣を負うて近代國家としての日本の建設に邁進せんとした時、殖産興業の部門に於いても、あらゆる他の部門と同じく、先づ國家が先頭に立たねばならなかつた。例へば鐵道電信の敷設等に就いても政府當局の大隅重信、伊藤博文らが指導的立場にあつた。

しかし、當時の我國内の貨幣資本の蓄積は到底かゝる大事業を消化し得るものではなく、當然こゝに巨額の外國公債が必要となり、明治二年から三年に互り種々折衝の結果、ロンドンに於いて百萬磅の外債が發行されたのである。「九分利付外國公債紀事」とは即ちこの外債發行に關する經緯を輯録したものである。

次いで新政府が舊時代の封建的秩序を一掃せん爲、華士族の家祿に代へて公債を交附せんとした時、その資金も再び外國に募らざるを得なかつた。かくて明治五年大藏少輔吉田清成は命を受けて本國を發し、米國經由英國に赴き、遂に明治六年七分利付二百四十萬磅の募債に成功した。「七分利付外國公債發行日記」とは即ち吉田清成が本國出發より歸朝に至るまで、政府との往復文書、外國諸銀行との往復書翰及び契約書等を收載して、日々の出來事を克明に筆録したものである。「在歐吉田少輔往復書類」も亦同じくこの際に於ける吉田清成と政府當局者、殊に大隈井上澁澤らとの間に往復せる文書を主として録せるものである。

以上の如く本書は明治初年に於ける外債公募の委曲を盡してゐるが、單にそれは當時の我國の經濟的情勢を物語るのみでなく、微妙なる政治的社會的推移を示してゐるのは特に興味深い。殊に京大國史研究室に藏する彪大なる吉田清成文書も、同じくこの際の事に關するものを含み、彼此對照して當時の諸事情は一層闡明されると思

ふのである。(菊判三九八頁、東京改造社發行、定價四圓)(以上時野谷)

○四天王寺と美術 内藤藤一郎著

○難波古道の研究 竹山 眞次著

——大阪郷土史叢書——

大阪の地は古來「日本の臺所」としてその生命は經濟都市たるにあると考へられてゐるが、近時その發展の益々目ざましきものと共に、市民の間に大阪自身の文化を所有せんとする欲求の頼みに昂まり來つたのは顯著な事實である。かやうな欲求は祖先以來この地に住し、共にその繁榮の爲に盡し來つた人々の間に共通に存する郷土愛の感情と結びついて市民の關心を自ら歴史的なものの向はしめる。最近魚燈窓五郎氏を盟主とし、その地に住する若き歴史家達の協力になる大阪郷土史叢書なるもの、刊行が計畫されるに至つたのも、一にかゝる趨勢に應ずるものと考へられる。第一輯全十二編の中、既に上梓を見たものは上掲の二冊のみであるが、發表せられた豫定の計畫を見るとその意圖するところ必ずしも體系的

に大阪の歴史の諸生面を舒述しようとするのではなく、寧ろ個々に興味ある問題を捕へて自由なモノグラフを作らんとするもの、如く、夫々の方面に於てよく専門的知識の高さを保ちつゝ、なほ學術論文の態を裝はず、努めて平明に記述して心安易き親しみを以て通讀されんことを期してゐるかに見受けられる。四六版百五十頁内外、梶原緋佐子氏の圖案になる紙表紙の蕭洒たる外装もその目的にふさはしいものであらう。

今簡單に上掲二冊の内容を紹介すれば、前者は四天王寺創建の本旨を物部大連討伐に關聯せしめて説く書紀の記載にもかゝらず、なほ外敵に對する護國の思想に基くものとして、同寺に於ける塔婆の位置を重視し、今日金堂本尊を救世觀音としてゐることの本來の制ではなからうといふことから、それに代るべき四天王像が様式上特に四天王寺様と稱すべき特殊のものであつたことを考證し、更に塔婆内の四方四佛の形式の成立事情を稽へ、轉じて中世以後この寺に對する信仰の變化を説き、聖德太子を以て救世觀音の化現であるとする考へが、やがて